

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

## 【氏名】

小川真如

## 【所属】(助成決定時)

早稲田大学大学院

## 【研究題目】

日本農村における稲作の現代的意義 ―飼料用水稲の価格形成メカニズムに着目して―

## 【研究の目的】(400字程度)

日本では、国内米消費量減少の長期的傾向と国際米市場逼迫の将来予測が併存する中、米の生産調整が40年以上にわたって実施されてきた。有力な転作作物がない地域、特に農村では恒常的な生産調整は不作付けや耕作放棄の呼び水となり、水田の潰廃や地域社会の崩壊、ひいては国土保全や自然環境に悪影響を及ぼすことが指摘されて久しい。しかし未だに、稲作の撤退・喪失による農村の疲弊・崩壊という問題点に、具体的・決定的な解決策は見られていない。少子高齢化や担い手不足が進む中、日本農村の疲弊・崩壊への対応は、喫緊の課題となっている。

本研究の目的は、生産面積が急拡大している飼料用水稲(稲発酵粗飼料用稲、飼料用米)の経済合理的でない価格形成メカニズムの解明を通じて、日本農村における稲作の現代的意義や、日本農村の疲弊からの回復や崩壊阻止に向けた方策の提示を目指す。さらに、水田農業を基軸とする東アジア農業の一形態として飼料用水稲を位置づけ、欧米とは異なる自然と人間の共生モデルを検討する。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

研究目的を達成するために、2つの研究課題に取り組む。

まず、“日本農村と稲作の関係性”に関する先行研究の整理である。日本農村と稲作の関係性は、農業経済学分野にとどまらず、社会学や文化人類学等を含む多様な切り口から論じられてきた。このため、“日本農村と稲作の関係性”に対して精到にアプローチしなければ、稲作の長い歴史、多量で優れた先行研究をおざなりにした研究となる危惧がある。そこで、従来の研究では当然に食用米生産を指していた「稲作」の単語について、飼料用水稲にも当てはまるか読み直す作業や、飼料用水稲を指すコトバの恣意性に着目しながら先行研究を整理する。

次に、社会的紐帯に基づく、価格形成メカニズムを事例分析に基づき解明する。調査対象地は、稲作文化圏から畑作文化圏まで多様な地域性を内包する千葉県香取市である。香取市には、稲発酵粗飼料の流通円滑化を目的とした組織である香取市耕畜連携農業推進協議会が形成されている。聞き取り調査対象は、市内や周辺地域の稲作農家と畜産農家とした。

2016年度現在、稲発酵粗飼料用稲の生産に対して10a当たり80,000円の転作補助金が交付されている。この金額水準の端緒は2010年度の戸別所得補償モデル対策である。当時の米政策は、農村部を中心とした政局の変化や政権交代を伴うものであり、稲発酵粗飼料用稲への補助金もその一端を担った。稲発酵粗飼料用稲への補助金は、恒久的な措置ではないことから将来に対して不確実性を孕んでいるといえる。こうしたなかで、香取市では、稲発酵粗飼料の価格が変化しておらず、また、補助制度の不確実性に晒されながらも稲発酵粗飼料の利用を前提とするTMRセンター設立等の投資活動を行う畜産農家が存在する。

農家の行動原理を整理し、調査対象地における価格形成メカニズムを、経済学的にどう解釈できるのか明示する。とくに、稲作農家による稲発酵粗飼料用稲の導入や、この意思決定と畜産農家との関わりについて、

ある畜産農家の経営戦略や、価格形成を踏まえて特徴を考察する。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

香取市内の稲発酵粗飼料用稲生産農家では、地域特性が異なるものの、稲作に依存せざるを得ない状況への諦めが飼料用水稲生産の一つの背景となっている。稲発酵粗飼料に関する投資行動は、稲作農家と畜産農家の見解が折り合わないまま決定した価格条件であった。価格に対する関心を示すことは取り組み全体の基盤を揺るがしかねないため、稲発酵粗飼料の価格の硬直性とは、持続的取り組みを図る関係者の思惑の帰結であり、また「ぎすぎすした関係」を避けて農家が社会関係の維持・円滑化している含意もある。こうした実態からは、日本の飼料用水稲の生産拡大の要因として、諦めからくる立地条件の受容という農家行動が少なくないと考えられ、立地形成型技術によって食用米生産が進展した日本において、飼料用水稲の生産はむしろ立地適応型技術として展開している可能性を示す。香取市の取り組みでは、市内需給の緩和後も円滑な取り組みが継続しており、異なる特性の地域間を水稻によって結びつける新たな地域営農モデルであり、日本農村ならではの自然と人間の共生モデルの一端を示している。そして、農家は、財政負担に支えられた単なる業主としての性格のみならず、市内流通を目的とする協議会による取引費用削減の取組を通じて、新たなブランド力形成を目指す存在でもあった。ただし、香取市の取り組みについては、需給調整等について、周辺地域の稲作農家や畜産農家にしわ寄せが発生していることも確認された。香取市において今後も稲発酵粗飼料の生産拡大を目指す場合、ブランド構築によって市外需要の確保を進めるか、流通範囲の再設定を伴う地域戦略の再構築を行うか、検討する分岐点にあるといえる。